

No.2507

近代日本の東洋史学の構築と日中知識人の学術交流
—上海東文学社を手がかりに—

神奈川大学 特任助教
朱 琳

この度、りそなアジア・オセアニア財団の「調査研究助成」を受け、「近代日本の東洋史学の構築と日中知識人の学術交流——上海東文学社を手がかりに」をテーマとして研究活動を行なってきた。以下、活動の概要と研究成果を報告してみる。

日本と中国の近代史は解けがたく絡み合っている。近代日本の東洋史学の構築は日中知識人の知的交流を抜きにしては語られない。報告者は、中国最初の日本語学校だった上海東文学社をめぐる日中知識人の交遊の実態に焦点を絞り、羅振玉・王国維らがどのような契機で同時代の日本の学界と接触し、いかに翻訳に取り組みながら日本の知識を中国に紹介したのか、また、藤田豊八・内藤湖南らがいかに文化の往来を通じて甲骨文・敦煌文書など中国の最新成果を日本の東洋史学に取り入れ、東西交渉史の研究を行なったのか、について実証分析を行ない、清末民初の急激な社会変動における学術文化交流のあり方を探り、近代日本の東洋史学の成立の一側面を明らかにすることを目的とする。

この度の研究成果を出版予定の単著に反映させる一方で、部分的ではあるが、現段階での関連する成果は以下の通りである。

- ◎ 「梁啓超における中国史叙述——「専制」の進化と「政治」の基準（一）（二・完）」『人文研究所報』52号、53号、神奈川大学人文研究所、2014年8月、95～115頁；2015年3月、87～115頁。
- ◎ 「書評 山田智・黒川みどり編『内藤湖南とアジア認識——日本近代思想史からみる』』『東アジア近代史』17、2014年3月、192～200頁。

東洋史学の成立あるいは日中知識人の交流をそれぞれ分析した先行研究の業績を踏まえつつ、日中両国の多くの識者の注意をひきつけたにもかかわらずこれまで体系的に検討されていたとは言いがたい上海東文学社をめぐる日中知識人の交遊の実態について考察することは、百年前の日中学術交流の一面を描き出すことができ、東洋思想史の分野で、とりわけ知識人の思想と活動の理解について、新たな知見を提示できる。言論の具体的分析を通じて中国史研究あるいは日本史研究だけでは得られていない知見を獲得しうると信じる。

この度「調査研究助成」のご支援をいただき、心より厚く御礼申し上げます。今後一層精進を積み、優れた研究成果を出したいと念じております。どうぞ、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。